

経済学と生物学における生命価値の導出と、その人口学的含意
Economic and Biological Values of Life and their demographic
implications

影山純二 (明海大学)

Junji Kageyama (Meikai University)

kagejun@meikai.ac.jp

本研究は、経済学の標準的理論と生物学の生活史理論において別々に導出される生命価値 (Value of Life) と、その背後にある理論モデルを比較検討する。この目的のため、経済学モデルと生活史モデルを用いてそれぞれの生命価値を導出し、以下の3点について考察する。1つ目は両モデルの数学的構造についてである。両モデルとも「制約条件付き最適化問題」として定式化できることから、両者の間に方法論的類似性があることを示す。2つ目は、人口経済学と生物人口学それぞれにおける含意についてである。特に両モデルが死亡率や出生率、健康投資、時間選好率といった変数の最適年齢経路を計算する上で有用であることを示す。

3つ目は、両モデルの整合性についてである。経済学も生物学も行動を分析する場合、それぞれのモデルで導き出される予測はお互いに整合的でなくてはならない。経済学は「行動は効用最大化で近似できる」、生物学は「適応度を最大にした行動が結果として自然選択され、子孫に受け継がれる」と、行動分析の入口はお互いに異なるものの、同じ行動について予測する場合、その分析の帰結はお互いに整合的、あるいは会話可能である必要があるのである。この観点から両モデルより導き出される仮説について比較する。そして、生活史モデルを利用し、選好や効用といった経済学の土台となる仮定をより精緻化できることを示す。具体的には、年齢という人口学的変数を導入した行動研究の必要性を指摘し、選好の年齢依存性を経済学に導入する有意義性を示す。